

澤田ふじ子

忠臣蔵悲恋記



徳間文

徳間文庫



ちゆうしんぐら ひ れん き
忠臣蔵悲恋記

© Fujiko Sawada 1991

き - 11 - 9

1991年12月15日 初刷

著者 澤田ふじ子 さわだ ふじこ

発行者 荒井修 あらい おさむ

発行所 東京都港区新橋四一〇千一〇五
株式会社徳間書店

電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)
振替 東京四 四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社

編集担当 吉川和利

ISBN4-19-599428-4 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

忠臣蔵悲恋記

澤田ふじ子



徳間書店

目次

後世ごせの月 小野寺十内の妻 5

しじみ河岸がしの女 橋本平左衛門とはつ 47

うそつき 内蔵助の娘 87

幾世いくよの鼓つづみ 礒貝十郎左衛門と多佳 127

解説 縄田一男 247

後世ごせの月

小野寺十内の妻

1

朝顔が相国寺垣にのびている。

真夏のあき、小さな門をくぐってきたお客人は、玄関にたち奥から案内がくるまで、いつも見事に咲いた朝顔の花をみるのである。

相国寺垣のむこうは、齒朶類をしげらせた小さな茶庭だが、朝顔のあることで野趣がうまれた。

わたしの夫、赤穂藩京屋敷留守役小野寺十内どのは、わたしと子ども、和歌をひねるかたわら、六十ちかくになつてから、盆栽や花卉に興味をもたれ、この数年、もっぱら相国寺垣に朝顔を這わせておられる。

丹念に一粒ずつまかれた種は、はやくから芽をだし、暖い日がつづいたため、にわかには蔓をのばしていたのだ。

「ことは、この朝顔も見られぬかもしれぬ。冥土の蓮の台からながめることになる」
十日まえ、十内どのは具足櫃を背おい、半柄の棺をにぎり、播州の赤穂に発つていかれた。小者の藤助が、白帷子と着がえを入れた挟み箱を肩にして供についた。

そのとき、玄関の小さな式台に手をつかえたわたしに、朝顔の花を眺め静かにもうされた。

——これが今生の別れになるかもしれぬ。

十内どのの朝顔にことよせ、いいきかせたおつもりなのだろう。

十内どのとわたしは、歳がまるつとひとまわりちがう。

「ご武運をおいのりいたしておりまする」

胸の奥底からこみあげてくるものをぐつとこらえ、わたしは平静をよそおった。

夫婦ともこの歳になり、こんな事態に出会うとは、夢にだに思わなかった。半月あまりの疲労が、十内どのの顔をどす黒くみせている。鏡でみたわたしの顔もおなじだった。

二人とももう爺婆の歳だ。

わたしは石女で子どもをうまなかった。

十数年まえ、甥の大高源五どのの弟幸右衛門を養子にむかえていた。

幸右衛門は二十六歳になる。

母は十内どのの姉貞立尼さまだが、父の大高兵左衛門どのをはやくに失い、源五どのと幸右衛門は、若くして剃髪染衣された貞立尼さまの薫陶をうけて、立派に育った。

そろそろ家督を幸右衛門にゆずり、わたしたち夫婦は楽隠居し、爺婆がそろって好きな歌のみにちに励みながら、日をすごそうかと、十内どのと語りあっていた矢先に、おとのさ

まのご刃傷という不測の霹靂がきたのであった。

おとのさまの殿中刃傷事件は、元禄十四年三月十四日、江戸城白書院にちかい松の廊下でなされた。遺恨から高家筆頭の吉良上野介義央どのに、斬りかかられたのである。

だが、おとのさまはご不運にも、梶川与惣兵衛なるものに後から組みつかれ、上野介どのを

討ち果されなかった。將軍綱吉さまはいたくご立腹、幕閣老中や若年寄の意見をしりぞけ、おとのさまは即日ご切腹、藩家はご改易に処せられてしまった。

「小野寺さま、えらいことでございます」

東洞院仏光寺を西に入った赤穂藩京屋敷に、この凶事をまず注進してくれたのは、関白近衛基熙さまの諸大夫をつとめる進藤筑後守さまの使いであった。

おとのさまのご刃傷から五日後の十九日、夕刻のことだった。

進藤筑後守さまは、ご家老大石内蔵助さまのご親類筋にあたる。

京都留守居役をつとめる夫十内どのとは、昵懇の間柄であり、使いは筑後守さまの小者で重助、かねてからの顔見知りだった。

「重助どの、どういたされました」

わたしは、式台に手をかけ、大きく息をあえがせている使いにたずねた。

赤穂藩の京屋敷といっても、間口は十二間、奥行きは十八間、屋敷とは名ばかりで、町衆の一軒家とさして変らない。しかも、隠居後は京に住むつもりで、わたしども夫婦が、家主から別棟だけを買っていった。

それだけに、奥庭に面した部屋で、病床につくお姑さまと話しこんでいた十内どののは、表のただならぬ気配をききつけ、あわただしくでてこられた。

「いかがいたしたのじゃ」

ご自分とおなじ年格好の重助どのに、せかしくただされた。

六十に手のとどく老人が、上京かみぎょうのご禁裏きんりさまちかくから駆けてくるのは、並みの用ではなからう。

重助どのはいきなり口もきけずに、ただ肩をあえがせている。

目だけがなにか言いたげに、わたしどもを見あげる。

十内どのとわたしは、苛立いらだちながら、使いが口をひらくのを待った。

いつものわたしなら、奥から飲み水を運ぶくらいの気働きをするのだが、その日にかぎり、切迫した重助どのの顔から目を離せないでいた。

「容易ならぬ使いとみた。重助どの、はやくもうされぬか」

さすがに十内どのも苛立いらだってこられた。

うながす声に、いきどおりがにじんだ。

「は、はい。筑後守さまのご伝言をもうしあげます。さる十四日、浅野内匠頭たみのかみさまには、江戸城において吉良上野介どのに対してご刃傷があり、奥州一ノ関城主田村右京大夫さまの芝田た村町むらまちのお屋敷に、お預けとのことでございまする」

重助どのは声もとぎれとぎれにもうされた。

耳にすることが、まるで信じられなかった。

だが、筑後守さまが、根も葉もないことをわざわざ伝えてこられるはずがない。重助どのを聞いただと、自分をとりあえず走らせ、のちにご自身がやっておいでになるとのことだった。あとになってわかったが、当日の早暁そうぎょう、江戸から早水はやみづ藤左衛門とうざゑもん、萱野三平かやのさんぺいのご兩人さまが、

早駕籠^{はやかご}をのりつぎ、わずか四日半で百五十七里の道を踏破、赤穂に凶事の第一報を知らされたという。

前夜の真夜中、ご兩人さまは、早駕籠でこの京の山科^{やましな}を走りぬかれていったわけだ。京には一日おくれでとどいたことになるが、これはご勅使^{ちやくし}の柳原前大納言^{やなぎのへいだい}資廉^{すけりか}さまが、早飛脚^{はやびやく}で関白近衛基熙^{きし}さまにお知らせになったのと、赤穂藩士が、山科でのりすてた早駕籠人足の口からもれてたのだった。

関白基熙さまからこれをきいた筑後守さまは、あわてて赤穂藩の京屋敷に、重助どのを使いさせられたのだ。

なお当日の夕刻、わたしたち夫婦が、おとのさまのご刃傷を知らされて間もなく、赤穂には江戸からの第二報が、原惣右衛門^{はらそうえもん}、大石瀬左衛門^{おおいせざえもん}のご兩人さまによってもたらされていた。おとのさまは、田村右京大夫さまのお屋敷で即日ご切腹、浅野家はご改易とのことであつた。

深更^{しんえい}、進藤筑後守さまの来訪をうけた。

柳原前大納言さまから、関白基熙さまに第二報が届いたというのだ。関白さまは筑後守さまに、そなたが直々^{じきじき}、赤穂の京屋敷に足をはこび、詳細をつげてやれとお言葉をたまわったそうである。

これは浅野家藩主が、代々、朝廷に尊崇の念をもち、内匠頭さまご先々代の久岳院殿（長直）さまは、寛文二年五月、藩財政をかたむけ、禁裏紫宸殿^{きんりししんでん}、ならびに内侍所^{ないししよ}のご造営をすすんで行なつたほか、久岳院殿さまのおあとをついだ父君采女^{うねめのしやう}正長友さま、またおとのさまも、

ご禁裏さまに忠勤をつくされたことに起因している。

十内どののうしろに坐り、わたしは筑後守さまのお言葉をつつしんできいた。

重助どのから注進をうけたあと、十内どののすぐさま、赤穂に詳細をたずねる使いをだされた。

京屋敷に出入りする商人に手配し、洛中から刃傷の噂をひろおうとされたが、なにしろ、おとのさまのご刃傷は百数十里はなれた江戸でのこと。普通の旅なら十二、三日かかるだけに、塵ひとつの話もあつめられなかった。

筑後守さまのお知らせはひどくありがたかった。

「内匠頭さまはご切腹、城地は召しあげとなれば、ご家臣のかたがたは禄を離れることになる。いかにもお気のどくじゃ」

「いかさま」

十内どのの声もなく涙をながされ、虚ろな声でつぶやかれた。

おとのさまのご切腹は仕方がないとしても、遺恨をもって殿中ご刃傷におよんだ吉良上野介どのは、一命をとりとめたごようす、またなんのお構いもなしとされたことが、女のわたしにも不満だった。

十内どのの浅野家の常陸笠間以来のご譜代、尽忠堅固なだけに、さぞかしご無念なことだろう。筑後守さまのお顔も、憂慮の翳がふかった。

どこからともなく、花の匂いがただよってくる。

奥からお姑さまの乾いた咳せきがもれてきた。

十内どのの父上さまは小野寺又八、ご母堂さまは、同藩の多川九左衛門さまの娘で満さまという。歳は九十一歳になられ、ながく病床にふせられていた。

「十内どの、ご母堂さまのご容体ようたいはいかがでござる」

筑後守さまは、うち沈んだ部屋の雰囲気をはらうようにもうされた。

「なにしろ母は、当年九十一になり、歳でございますれば、容体もさしてはかばかしはございませんぬ」

十内どののは張りのない声で答えられた。

「では、わしはこれでおいとまいたすが、江戸から新しい知らせがもたらされれば、すぐにも使いを出させましょう。十内どのにはご母堂さまもいらせられますことゆえ、かまえて短慮なお振舞いがございませぬようにな。ながい人生には、いろいろなことがあるものです」

筑後守さまは十内どのに、殉死じゆんしをいさめられたのだった。

翌日の昼すぎ、赤穂のご家老大石内蔵助さまからの使いが到着、京屋敷の運営を停止ちやうじし、金銀請け払いのうえ、指図をまてとのお言葉が届いた。夜に入り、京都所司代さまから、赤穂藩京屋敷を召しあげるとのおもうしいれがきた。

凶事はいよいよ現実となってきたのだ。

おとのさまの刃傷から六日目、ようやく京都もその噂でもちきりになった。赤穂藩京屋敷には、朝から見舞い客がたえまなく訪れた。

十内どのはご来客をむかえながら、京屋敷を停止するため、人と会い、そろばんをはじいておいでになる。

赤穂に心を馳^はせながらである。

2

そもそも、各藩が京都に藩邸をもうけたのは、朝廷公卿^{くぎょう}との接触を深め、伝統儀礼の修得と、高級呉服など、京ならではの品物を買入れるためであった。

あわせて、京商人^{あきんど}に藩産物を売りさばく役目も負っていた。京都留守居役は、いわば世故^{せこ}にたけた藩士にしかつとめられなかった。

十内どのは赤穂にあったときは、郡代につかれ、久岳院殿さまがご禁裏さまのご造宮でもたらされた藩財政危急の建てなおしにつくされ、十数年前からは京都留守居役として、わたしともども京にやってきたのだ。禄高は百五十石、役料に七十石をたまわった。

「藩中をぎっと見まわしたところ、京へはそなたをおいてやる者がない。難儀な役目だが、まげて承知してもらいたい」

前任者の建部喜六さまご死去のあと、大石内蔵助さまがご懇望されたのは、わたしども夫婦が、文雅風流をたしなみ、十内どなど里竜^{がごう}の雅号^{がごう}をもち、歌の道へのおもしろい入れが深かったことによる。

京都の人々は、朝廷公卿はもちろん、町衆でも風雅を心得ている。

京屋敷の留守居役ともなれば、文雅の知識くらいなければ、勤められないのであった。

さいわい、わたしども夫婦は、京の医者であり、歌道にも蘊蓄うんしやくのふかい金勝慶安さまについて和歌を習っていた。夫婦の歌を飛脚たきやくに託し、添削てんせきをうけていたのだ。

金勝慶安さまは、三条西家お出入りの医者。松永貞徳門下の歌人木瀬三之きせさんしの弟子として、多くの初心者を指導され、わたしども夫婦にも、心やすく接してくだされた。京都留守居役が本決りになると、和歌を本当にならうなら、やはり京にまざる所はない、京歌壇に名をあげ、骨を埋めるおつもりで参られよ、との手紙すらいただいた。

「慶安さまもこうもうされている。われらにとっては幸運なお役目というべきだ」

十内どのは大石内蔵助さまに、すぐお役をうけたまわるとの返答をもうされた。

あわせて、甥大高幸右衛門を、養子にむかえたいとお願したのである。

「十内どのの歌に心得があり、京で留守居役につけば、藩家もご自身もともによからうと思つてたが、甥どのを養子にしたいとは、またよいご思案じゃ。藩家に異論はあるまい。わしからも口をそえよう」

大石さまはなにもかもお見通しで、十内どのを京の留守居役に命じられたのだらう。

言葉にこそ出されなかったが、わたしども夫婦が歌を詠むのは、子どものない寂しさを、歌でなぐさめていることもご存知だった。

幸右衛門にその気があるなら、いずれ、十内どのの職分をつがせてもよいと言葉をそえられ